詠ひたるハ稀有の様なれど、因て近来新作
詩なるいふもの續出せしい勢ひ、ふ〳〵い今試
みにキングスレーの悲歌一章釋出の分を左に記
し一粲に供へ申さん

無事を告る入相の、鐘の音ならなくなれば、
三人(ミタリ)の漁夫ハ帆を上て、入る日を指て西の海に、
走らせ船ハ進めども、妻子の為めに引さるゝ、
心の中ハ皆同じ、父の出船を眺めつゝ、
沖に向ひて行める、童子のハ外に餘念なし、
まうけハ薄く子澤山、雨の降る日も風の夜も、
洲に打揺る浪の音の、最々聞きましき其時も、
稼かなやならぬ男の身、袖のひぬのハ女子の身、

三人(ミタリ)の漁夫の妻三人、日も西山に入相の、
鐘もほのかに聞かれば、共に籠りし燈臺の、
火を挑んと立寄りて、つまめる心の支(つま)思ひ
窓の戸開けて眺むれば、俄雨やら暴風(あらし)やら、
空うち曇るむら雲の、色黒々々おもむし
あらしのいかに吹けばとて、水かさハぬ何に増ハとて
洲に打揺る浪音ハ、ぬ何程ほどく聞ハとて、
稼かなやならぬ男の身、袖のひぬのハ女子の身

朝日かゝやく砂磯に、潮引き去りて其跡に
殘るハ三つの屍ぞ、三人の漁夫の妻三人
歸らぬ旅に門出して、歸らぬ夫のなきがらに、
髪ちり乱し取すがり、消るばかりに泣入りて、
目も当られぬ風情ぞ、稼かなやならぬ男の身
袖のひぬのハ女子の身、一日も早く世を去れば
一日も早く無をせん、屍の跡の砂磯に
寄せまる浪の碎けつゝ、鳴る瀧ゃなれよ工、俄よ

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

以上ハ世界相にして所謂る三界火宅、苦の海夜波夜など

歸らぬ旅に門出して、
髪を乱し面をかくり、
目もあてられぬ風情なる、
神のしらぬのはかなさの身、
一日も早く無きをせん、
寄せまする涙の深けて
オ オ さ や　や さ め め

歸らぬ父の子ながらに、
泣るばかりに泣入りて、
様なるやあらぬ男の身
一日も早く世をさられバ
庭の隅の砂礫目
鳴る流やなれよ工作よ

以上ハ草稿にして所謂る三界火宅、苦の海を渡るもの
の意味をよく説きたるものなれバ一読にてハ翻訳拙き
ためいと印稿の如く思ひなくも十分意味を研究
いたし候時ハ我国の詩にハ少しも得ぬ深刻の情躍然
致しをり候、右ハハムレット（此草稿をいはゞ訳すべき）ハ
英國沙翁の作にかゝれしもの

扨前条の儀兎角容体思はしからず困却、昨日来りハ
絶食にて疲労を極める一方なりしかも医師ハ
生命にハ別條なしとすれど患者ハ健かなるも躰の方
衰弱、甚しきならぬ容体、或日ハ虚脱療法
陥入り危険に至るやも知れぬ由、諸事小生へ
に周旋あれ其新館なるも遅れるまじき故内
討議の如く通りみれハ あと傳ふるなみけん
ろうは病て御返却なれ申さんも車海につき
然らく御緩様願ハしく以 都合つきしを持て返し上
以る時ハ新関代一時お支拂ひくれ思召にて此様
候ふよりも御願申

隣て女中上京の女中ハ女の様子あまり以来様く
心がけ先頃漸く夜分りしも暮に節れ其後の事
然らしか旧女ハ今駿河台にみつ別条なく過
しみてよく 彼の妻三頭なる人小生方近辺に住み
なしみてを漸く参えし再度訪問いたしみなしかね
人も中間の用達をいたしみて宅ながらく宅にハ
然らぬ程にて一二度面会いたし迄に出し別条なく

陰入り陰陰に至るやとも存世れ中々諸事小生人
に周印あれ書新作ものなども多遠れなる成内
計其ゆゑ通ひくしみて其後ハ御借あるべき筆
今日添て御送印ある上なれ御存ゆゑ事情につき今
略らく御後粧頭ハしくしい都合つき御身お廻し上
以上ゆゑ新聞代一時お支拂ひ給ひ罵詈にて此粧
陰とも御賴ひ
陰て御略き中上まいてお見せ女の様子当事以来種々
心がけ先頃漸く御分りとも書に節れ其儀なる成
其らひしか日女ハ今駿河屋にみたり別条なく送
し其とも後の喜三郎ある人小生方近辺に住其
ひくみを漸く奪えし再應訪問ひくしみたりしかは
人も皆者の用達をひくしみて宅にハ
其らぬ程にて一二度面倉ひくしみ近に至て別条なく
其事丈分れ心小生の目的ハ御達しく譯氣ハ其後
ハ強て見ずゆる事ハ此さまにて彼の人の見鏡二、尽ひ光
母氏も共に鬼籍へ入り中々宅之者序なからせ上
先ハ幸便に任せ以上当用迄めけみて
十一月十五日
相上
[illegible]
[illegible]